

<目的> 高齢化社会が進行し、リハビリテーションを施行している高齢者の割合が増加している。ところが、リハビリテーション施行の有無は病院給食の内容に反映されていない。そのため、特に糖尿病治療中の患者の場合、摂取エネルギー量が不足してリハビリテーション施行後に低血糖で倒れることもある。そこで本研究は、リハビリテーション施行中の消費エネルギー量を把握して病院給食の内容に反映させることで、患者の健康管理並びにリハビリテーションの効果をあげることを目的とした。

<方法> ①調査対象：名古屋記念病院（名古屋市）に入院中の60歳以上の患者を対象とした。②消費エネルギー量の推定：起床直後に心拍数連続記録装置を患者に装着し、就寝までの心拍数を記録し、心拍数と消費エネルギー量の関係式を利用して、起床から就寝までの消費エネルギー量を算出した。③摂取エネルギー量の推定：処方された毎食の病院給食から残食量を差し引くことにより、実際に摂取したエネルギー量を求めた。病院給食以外の補食があれば、記録用紙に全て記入してもらい、1日の総摂取エネルギー量を推定した。

<結果> 患者毎の個人差を考慮する必要があるが、リハビリテーション施行日の摂取エネルギー量は消費エネルギー量を下回っていた。リハビリテーションを施行しなかった日のエネルギー出納バランスがとれていることから、リハビリテーション施行による消費エネルギー量分が不足していると推測できる。したがってリハビリテーション施行日には、不足分を何等かの形で補給する必要があると考えられる。